



治療を終え、元気になるまで！

ドイツ国際平和村の子どもたちは、治療を受けるため、ドイツに滞在しています。
アフガニスタンのシェキバや治療を受けている子どもたちを1年間、追跡取材しました。

文: Michael Gütthlein

写真: Toby Binder

カブールからデュッセルドルフ空港に到着し、このまま、病院へと救急車で移動します。

帰国？それともドイツで引き続き治療？

シェキバや彼女の友だちが、食堂にいます。今日の食事は子どもたちの大好きなミートソーススパゲティ。そして、デザートにイチゴヨーグルトです。ドキドキする子どもたち、うわさ話が飛び交い騒がしくなりました。治療を終えて、母国に帰れるのは誰だろう。引き続き、治療をするため、ドイツに残るのは誰だろう。食事後には、帰国する子どもたちの名前が発表されます。ラビーナは、すでにわかっているのでしょう。微笑んでいます。2020年9月末、ここにいる子どもたちは、長い治療をようやく終えました。何千キロも家族と離れ、元気になるため

に、手術を受け、痛みに耐えてきました。シェキバは、ラビーナと帰国することを心から望んでいました。

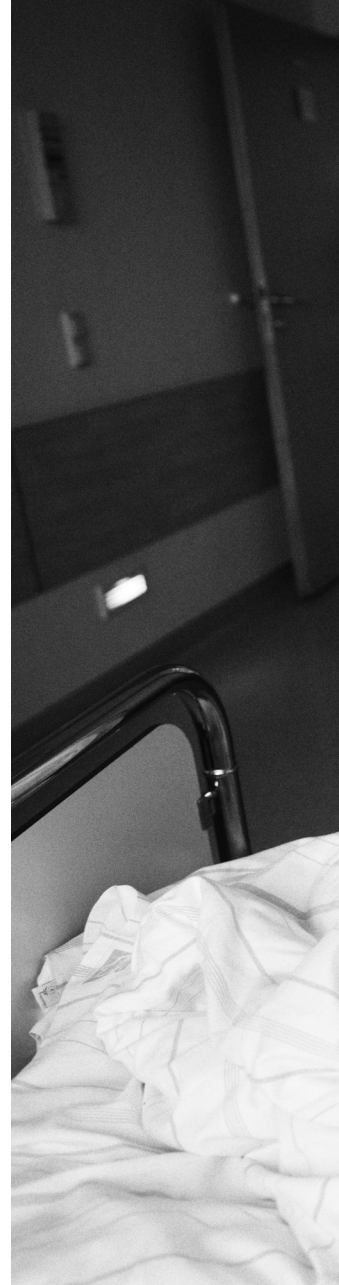
シェキバ、10歳、やせ型の恥ずかしがり屋。2020年2月12日にタジキスタンの航空会社 Somon Air のチャーター機でドイツ・デュッセルドルフにやってきました。チャーター機には、74名のケガや病気を抱えた子どもたちが乗っていました。彼らは、それぞれ、アフガニスタン、タジキスタン、キルギス、ウズベキスタンからのこのチャーター機に搭乗しました。この日の気温は0度。とても冷たい風が吹いて

います。救急車とバスが滑走路へ移動し、救急隊員たちが子どもたちに毛布を掛け、移動を補助しています。その中にシェキバもいました。左足に強い痛みがあり、松葉杖なしでは歩行ができません。

子どもたちは、それぞれ、顔に瘢痕があったり、足が屈曲していたり、腕に包帯を巻いていたり、片方の足が極端に短かったり、中には泣いている子どもたちもいます。



アフガニスタンのマルーフ医師(舞台真ん中)が治療のため渡独する子どもたちの家族へ説明をしています。マルーフ医師は援助飛行に毎回同行しています。



“もしも、アフガニスタンに残っていたら、 足を切断しなければならなかった”

ラビーナ(12歳)

空港では、様々な業務をスムーズに進めていかなければなりません。バスに乗る子、病院へ移動するため救急車に乗る子どもをスタッフや救急隊員が分けていきます。子どもたちの受け入れ病院はドイツ各地にあります。直接病院に入院ではなく、バスでドイツ国際平和村の施設へ移動する子どもたちもいます。デュッセルドルフ空港から施設まではバスで30分ほどです。

ドイツ国際平和村では、50年以上もこの活動が続いています。2歳から12歳までのケガや病気を抱えた子どもたちを、紛争地や危機的状況にある地域より年間250名から300名ほどドイツへ連れてきます。子どもたちは半年、もしくはそれ以上の期間を治療のため、ドイツで過ごします。彼らの母国では医療制度が整っていないため、治療することが不可能です。



シェキバ。ドイツ到着初日。足に激痛あり。アフガニスタンでは、これ以上治療ができませんが、ドイツ・ゲロルシュタイン市の病院では治療が可能です。ドアの向こうからラビーナがのぞいています。

到着後の朝：

シェキバは、ドイツ・ゲロルシュタイン市にある聖エリザベス病院の隔離部屋にいました。テレビ用のイヤホンで遊んでいます。彼女の両親がくれた赤と黒の毛糸の帽子と黒いマフラーを巻いています。シェキバはアフガニスタン西部のヘラートの出身で、両親と姉妹・兄弟と一緒に暮らしていました。

シェキバは彼女の部屋に入ってきた感染防護服を着た大人たちを疑い深く見つめます。ドイツ語はわかりません。わかるのは、ドイツ国際平和村スタッフがチャーター機の中で教えた平和村ジェスチャーです：「トイレに行きたい」（グーの手で親指を上げる）「おなかが空いた」（手の指を閉じて口へ運ぶ）「痛い」（手の甲をさする）
シェキバは父親手製の木の松葉杖を

使って、部屋中を駆け回ります。

夜、シェキバは泣きながら、パパ・ママと呼んでいました。隣の部屋にいたラビーナがシェキバをなだめます。ラビーナもアフガニスタンから治療のためにドイツにやってきた女の子です。「私はシェキバに“泣かなくて大丈夫だよ。ここにいることはパパもママも知っている。ドイツ国際平和村にはたくさんの友だちがいるわ。”と言いました」落ち着いて、しっかりとした12歳のラビーナがそう語ります。年齢よりも年上に聞こえる低くて太い声をしています。ラビーナはすでに1年以上、ドイツで治療を受けています。そのため、ドイツ語も流暢で、シェキバの通訳もしてくれています。「ドイツへ到着して1週間目は、私もよく泣いていたわ」とラビーナは話します。

「基督教の精神に基づき、支援を続けています」

ゲロルシュタイン聖エリザベス病院
医師Andreas Leffler

ラビーナはだんだんと新しい環境になれ、9回の手術をすでに受けました。「もしも、アフガニスタンに残っていたら、足を切断していたと思う」現在、ラビーナは問題なく歩行ができるようになっています。

到着後1日経過。シェキバの検査結果が出ました：

血行性骨髄炎。原因はたぶん治療をしなかった扁桃腺炎によるもの。未治療の結果、感染症で四肢に影響が出てしまうことがあります。最悪の場合は、敗血症で亡くなることもあります。

ドイツ国際平和村とゲロルシュタインの病院による共同活動のきっかけは、この病院の Leffler 医師です。彼は、長年、軍の外科医として、アフガニスタンや諸外国で活動していました。「現地の医療状況はよく知っています」と彼は言いました。「ドイツでは治療支援をすることが可能です。これは100パーセント、キリスト教の精神によるものです」そして、それらはプロボノ（各専門家が自身の知識や技術を無償で提供し、社会貢献すること）です。病院は、入院や治療に掛かる費用を負担、登録ボランティアが子どもたちに付き添う。この無償で治療を提供してくれる病院が、年々減少してきているとドイツ国際平和村代表のケビン・ダールブルフは語ります。

シェキバはドイツに来てまだ日が浅く、ホームシックが強くなり、泣いてばかりいました。ある日、彼女が窓から逃げだそうとしているのに気がついた病院の医師たちは、一度ドイツ国際平和村の施設で生活させることにしました。

ドイツ国際平和村施設には、居住施設、リハビリテーション施設、学びの場、それに大きな食堂があります。壁には、以前いた子どもたちの絵もびっしりと飾られています。いろいろな言葉で書いた「平和」の文字が目にとまります。屋外にはスポーツができるコートや公園もあります。

シェキバは3月6日と3月26日に手術を受けました。感染している部分の骨を取り除きます。医師たちは骨に穴をあけ、検体をとり詳しい検査で、病原菌を突き止めます。

食事の時間：
「いただきます」
ではなく、
「平和」
の掛け声で食事が
始まります。

ドイツ国際平和村での子どもたちの団結力はとても強い。

彼らの母国では、大家族の中で大きい子が小さい子の面倒を見るのが当たり前なのです。





その後、抗菌薬を炎症の起きている部分に投与し、新たに炎症が起きることを防ぎます。時間が経つにつれ、骨も新たに形成されます。「これなら手術が可能だ」とLeffler医師は言います。「このような炎症の多くは、全治可能です。形成異常になったり、足の切断をする必要はありません」シェキバは5月に再手術の予定です。脛骨の一部に肋骨の骨を移植します。その箇所にメタルを入れ、足を安定させます。

シェキバが渡独した直後から、コロナ・パンデミックにより、ドイツ国際平和村の活動が様々な影響を受けています。ドイツ国際平和村への訪問も規制され、子どもたちへ算数や母国語を教える学びの場のボランティアスタッフも来ることができなくなりました。スタッフたちは、3シフト制で勤務しています。子どもたちを毎日検温し、体調管理をしています。最も大きな影響を受けたのは、定期的に取り組んでいるアフガニスタンやアンゴラへの援助飛行です。今も、治療を終えた子どもたちがいつ母国へ帰国できるかは、はっきりしていません。治療を必要としている子どもたちの受け入れもストップしています。ドイツ国際平和村にとって、とても辛い時期です。

「家族は、私たちが信頼し、ドイツでの支援を必要とします」

アフガニスタン
マルーフ医師



1967年12月、ドイツ国際平和村は初めて医療援助を行いました。対象は、ナパーム弾で火傷を負ったベトナムの子どもたちでした。

1975年に、ベトナム戦争が北ベトナムの勝利で終結した際、ドイツ国際平和村に滞在していた南ベトナムの子どもたちを母国へ帰国させることができませんでした。子どもたちは、その後、ドイツで生活していくことになりました。ドイツ国際平和村は、1980年代までは、帰国できなかったベトナムの子どもたちの世話に従事していました。この経験から、現在では治療を受ける子どもたちは、治療後必ず母国への帰国受入れを保証してもらうことにしたのです。そして、政治的にも宗教的にも中立の立場でいることを心がけています。そうすることで、家族間や公的機関、それに宗教上で問題が起こることを避けられます。ドイツ国際平和村では、宗教的な祝日の祝い事はしません。クリスマスやラマダンの終了を祝うお祭などはせず、フリーデンスフェスト(平和を願うパーティ)を年末に開催します。



ドイツで治療を受けている子どもたちは、義務教育を免除されていますが、登録ボランティアスタッフたちにより、様々な学びのプログラムが提供されます。

「“強くいる”という意味が、ドイツ国際平和村とドイツでは全く違うように感じます。」

ドイツ国際平和村
カトリン外科医

ドイツへ治療へ来る子どもたちのリストは、現地のパートナースタッフが準備します。アフガニスタンには、協力して活動をしているマルーフ医師がいます。ふっくらした体形で白い長ひげを生やした男性は、静寂なオーラをまとっています。彼は援助飛行の際は、必ず子どもたちに付き添い、ドイツへやってきます。「家族は、私たちが信頼しています。そして、ドイツでの支援を必要としています」と英語で説明しました。各地域にいる医師たちとのネットワークを通じて、マルーフ医師に連絡が入ります。そして、ドイツでの治療が必要かどうかを判断しています。

2020年8月3日。シェキバは、順調に手術を終え、ドイツ国際平和村でリハビリをしていました。ドイツ語も少し話すようになりました。父親の手製の松葉杖ではなく、整形外科用の松葉杖を使用するようになっていました。嬉しそうに友だちと庭を駆け回り、ブランコや滑り台で遊んでいま

す。

「子どもたちの中には、問題なくすぐに新しい環境に慣れる子もいます。」

シェキバのように、慣れるまでに時間がかかる子どももいます。」とスタッフのManazは説明してくれました。53歳になる彼女は、6年前から子どもたちの施設担当スタッフとして働いています。約50名ほどの女の子たちが彼女の担当です。朝、子どもたちを起こし、ベットの整頓や歯磨き、髪をとかすまでつき添います。検温や痕跡のクリームを塗り、おねしょをした子どものシーツを取り替え、病院へ行く子どものカバンの準備をしています。その間、子どもたちとハグしたり、話に耳を傾けたりもします。「シェキバが病院にいるときは、電話で会話をし、気を落ち着かせました。」

Manazのように子どもたちの施設担当スタッフは、子どもたちが安心して生活できるように考えて仕事をしています。だからといって、代理ママになってはいけません。このバランスのとり方とはとても難しいものです。子どもたちは治療を終えたら、母国の家族のもとへ戻ることを知っています。子どもたちが混乱しないためにも、このバランスのとり方は大事なことです。食堂では、大勢と一緒に食事をします。子ども同士は、母国語で会話しています。一部屋に4人の子どもたちが共同で過ごしています。「働き始めたころは、仲がよくなった子どもたちが帰国するたびに寂しくて涙を流し、それと同時に帰国を大喜びしていました」とManazが語ります。「この仕事を続けていくなら、子どもたちはいつか必ず元気になり、母国の家族の元へ帰国していく。彼らは、治療をするためにドイツへやってきたんだと理解しなければなりません」

「子どもたちは、ほっとできる場所を求めています」と語るのは、リハビリテーション施設のカトリン外科医です。家族から離れ、治療のためドイツに滞在することは、容易にできることはありません。「“強くいる”という意味が、ドイツ国際平和村とドイツでは全く違うように感じます」ドイツ国際平和村の支援



帰国する子どもと治療のためドイツに残る子どもの別れのシーン。窓越しに別れを告げます。

で治療を受けている子どもたちは、母国の両親と手紙のやりとりをしています。これは実用的な方法でもあります。家族の中には、地方に住んでいて、携帯電話やインターネットなどが普及していなかったり、入手できなかったりします。

どの家族にも平等であるために手紙の交換をするようになりました。電話で声をきいて、お互いのホームシックが強くないためにも、この方法が一番有効です。

子どもたちと家族を長い期間離して大丈夫なのか？という質問にドイツ国際平和村代表ケビン・ダールブルフが答えてくれました。「これまでの経験で、大丈夫だと理解しています。どの年齢でも治療後の母国への再イン

デグレーションは可能です。ただ、ドイツの滞在が長くなればなるほど、困難なこともあります。」「もしも、子どもたちのケガや病気が治癒し、身体的には元気になったとしても、そのために心理・精神的に負担が出てきたとしたら、子どもたちを預かる上での責任をまっとうしているとは言えないでしょう」コロナ危機で、子どもたちは通常よりも長い期間ドイツに滞在しなければなりません。子どもたちから「いつ帰れるの？」と聞かれます。タジキスタンへ飛ぶ飛行機に空席がでたと聞いたドイツ国際平和村はすぐに子どもたちが帰国できるように予約を入れ、慌ただしく帰国準備がされました。このような非日常があると、子どもたちの中に動揺が走ります。

ドイツ国際平和村

ドイツ国際平和村は1967年にあるグループにより設立されました。グループの中には、プロテスタント教会の牧師だったFritz Berghausもいます。設立当初の目的は、イスラエルとアラブ諸国の6日間戦争で傷ついた子どもたちへの支援でした。この戦争は6日後、国連の仲裁が入り、停戦となりました。当時、ベトナムでも内戦が続いており、ベトナムで傷ついた子どもたちへ支援をすることにしました。1980年代にはアフガニスタン、その後ジョージア、アンゴラへの援助を始めました。現地の医療状況向上のため、各国に医療プロジェクトや基礎健康診療所を建設する活動も行っています。ドイツ国際平和村の活動は寄付で成り立っています。



ドイツ国際平和村には公園やスポーツ広場があります。シェキバはようやくドイツでの生活に馴染んできて、ホームシックも減りました。

ドイツ国際平和村には公園やスポーツ広場があります。シェキバはようやくドイツでの生活に馴染んできて、ホームシックも減りました。

帰国用カバンを詰めるという作業。これはドイツ国際平和村では大切な儀式のようなものです。子どもたちは私物やお気に入りの衣類を母国へ持ち帰ることができます。帰国がカオスにならないように、事前のこの作業は済ませておきます。タジキスタンの子どもたちの帰国が急に決まったことを経験した子どもたちは、自分たちのカバンも念のため詰めてもよいかどうかをスタッフに聞いていました。もちろん、事前にカバンを準備してよいとの返事で、子どもたちは喜びました。

9月22日。ドイツ国際平和村は翌日アフガニスタンへ飛ぶチャーター機を準備することができました。コロナ感染が広がってから、初めてのチャーター便です。帰国する子どもたちの名前が食堂で呼ばれます。名前が呼ばれると拍手と机を叩く音が響きます。子どもたちの中には「Nach Hause(家に帰れる!)」と叫ぶ子もいます。シェキバの名前は呼ばれません。涙をぬぐっています。彼女の治療はまだ終わっていません。メタルを足から抜く手術がまだあります。シェキバは机の下にもぐってしまいました。友達が彼女を慰めます。「シェキバ、泣かないで」シェキバは小さい声で言います。「私も帰りたい」

翌日、帰国する子どもたちとのお別れの日です。帰国する子どもたちは、きれいな服装をしています。女の子は、カチューシャをしていたり、スカーフを巻いていたたり、男の子たちは、ハンチング帽やサングラスをかけています。子どもたちが合唱し始めました。「Gewonnen(勝った) Nach Hause(家に帰れる!)」小さな行列がドイツ国際平和村の施設を出発します。少し離れたところにいるスタッフやドイツに残る子どもたちに手を振り、最後にもう一度ハグをしたり、「Danke(ありがとう)」と伝えています。シェキバは、はじっこに隠れるようにいました。子どもたちが通り過ぎるとき、シェキバは目を閉じていました。

10月14日。シェキバのメタル除去の手術がありました。残念ながら、症状がよくありません。2週間後、再手術が予定されました。彼女の治療がどうなっていくかは、これからです。うまくいけば、2021年前半には、母国に帰国できるかもしれません。身長も伸び、ドイツ語も流暢になり、痛みなく歩くことが可能になっているでしょう。

Michael Güthlein:
ドイツ国際平和村に1年以上通い続けました。ケガや病気を抱えていても、子どもたちが明るく、無邪気に遊ぶ姿が印象強く残りました。

Toby Binder:
写真家。久々に会った子どもたちが自分の名前を憶えてくれたことが嬉しかった。子どもたちからは、Toby(トビー)ではなく、「Tuppi(トゥッピー)」と呼ばれています。

出典: 2020年12月発行
“chrismon“
(プロテスタント雑誌)